

3年生の志望校検討会の実施時期と内容

回	時期	目的・内容	参加者
第1回	約1週間前に事前検討会		進路指導部 3学年団 教科担任
	6月下旬	生徒の志望校や学力、課題を共有。志望校の合格可能性を検討し、生徒の学力や適性を見て、別の可能性がないかも探る。その結果を基に面談で生徒に揺さぶりをかける	
第2回	約1週間前に事前検討会		進路指導部 3学年団 教科担任
	9月下旬	9月までの模試の志望校を基に、7月の面談以降の生徒の志望状況を共有。教科のテコ入れ状況、夏休みの過ごし方も確認する。成績を含めて再度志望校の検討を行い、必要に応じて代替案を用意する	
第3回	約1週間前に事前検討会		進路指導部 3学年団 教科担任
	12月上旬	センター試験を見据え、志望校のシミュレーションを行う。担任及び進路指導部が作成したものと生徒の志望を比較検討し妥当性を探る	
第4回	1月下旬	センター試験の結果を受け、出願校を検討。担任及び進路指導部は先行して生徒全員の出願先をシミュレーションしておく。検討会では生徒の個別学力試験の学力や意欲なども確認する	進路指導部 3学年団 教科担任

志望校検討会の改善ポイント

- 事前検討会を進路指導部と3年生副担任で実施し、客観的なデータに基づく判断を行った上で、本検討会を効率よく進める
- 事前検討会では学部系統を文理二つずつの4グループに分け、系統ごとに検討を行う
- 検討会で判断の基となる資料に、模試の偏差値だけでなく、評定値、出欠などの情報も載せ、伸びしろをしっかりと測る
- 検討会で、担任としてどう判断するのかを厳しく問い、教師の指導力を高める

生徒資料の充実と 事前検討会の工夫で 教師の意識改革を図る

クラス数が減少する中で合格者数を維持するため、志望校検討会を改善してきた長崎県立佐世保南高校。効率化を図りつつも、生徒資料の充実や事前検討会の工夫などにより、教師の意識を高める場として進化しつつある。

生徒減により国公立大の
合格率の目標が38%↓60%に

長崎県立佐世保南高校は、2年前から志望校検討会の改革に取り組んできた。この10年間で1学年の生徒数が3クラス分減ったが、進学校としての評価を維持するためには大学合格者数を維持する必要がある。進路指導主事の山田宗光先生は次のように話す。

「10年前は国公立大の合格率は約38%で、130人が合格していました。しかし、6クラスになった現在

長崎県立佐世保南高校

◎1908(明治41)年に長崎県立佐世保中学校として開校。「自強自律」「和敬礼節」を校訓として、創造性豊かな知性と情操を養う。学力向上だけでなく、国際理解、英語教育、読書活動も推進し、幅広いコミュニケーション能力の育成を図っている。

設立 1908(明治41)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 (1学年) 約240人

11年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、大阪大、九州大、佐賀大、長崎大、熊本大、長崎県立大などに133人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ178人が合格。

住所 〒857-1151 長崎県佐世保市日宇町 2526

電話 0956-31-5291

Web Site <http://www.sanan.ed.jp/minami/>

特集

学力を伸ばし、志望を深める志望校検討会



北川昭彦 Kitagawa Akihiko
長崎県立佐世保南高校
教職歴10年。同校赴任歴7年目。進路指導部。「学校という集団で生活する大切さを教えたい」



石橋周一郎 Ishihashi Shuichiro
教職歴13年。同校赴任歴7年目。進路指導部。「深い進路教材・授業研究をするように心掛けている」



鬼塚聡 Onizuka Saotchi
教職歴19年。同校赴任歴2年目。進路指導副主任。「生徒が自らの可能性を広げるきっかけをつくりたい」



山田宗光 Yamada Munemitsu
教職歴20年。同校赴任歴11年目。進路指導主事。「世の中には思い通りにならないこともあることを教えたい」

は合格者を50%まで高めても合格者は120人で、合格者数150人となると合格率は60%が目標になります。保護者の現役進学志向も強く、これまで合格できなかった層を確実に現役合格させるためには、今まで以上に生徒と向き合い、志望校を考えさせる必要があります」

そこで、山田先生が着目したのは3年生で行う志望校検討会だ。同校

では「南高方式」として長年受け継がれてきた検討会だが、生徒数の多い時に始まったこともあり、検討過程がやや荒削りだった。そこで、会議を効率化し、生徒一人ひとりに掛ける時間を増やそうとした。

また、生徒に関する情報を今まで以上に詳細に把握する必要もあった。保護者はインターネットから多くの情報を得ていて、教師の声に耳を傾けてもらうためには、保護者が持つ以上の説得材料が教師になければならない。生徒一人ひとりをさまざまな角度から分析して学校の方針に説得力を持たせ、保護者から生徒の志望実現のために最大限の協力を得たいという期待もあった。

生徒の実態を多角的に把握し
伸びしろを見極める

改革の一つは、生徒資料の精緻化だ。以前の資料はそれまでの模試の結果を記載するだけだったが、各模試での志望校、3年間の評定値、出欠状況など、意識の変化や日常の様子が分かるデータを1枚にまとめた

図 第1回志望校検討会の資料(2010年度)

科目	国語	英語	数学	物理	化学	生物	歴史	地理	社会	総合	保健	体育	芸術	家庭	総合	合計
前年コスタ	4.1	53	53	47	47	54	55	51	466	740	595.6					
担任のコメント	D															
事前検討会の内容	D															
1~3年生での模試の成績	1~3年生での模試の成績															
模試に記入した志望校	模試に記入した志望校															
1~3年生での評定値	1~3年生での評定値															
1~3年生での出席日数	1~3年生での出席日数															

(図)。生徒の実態をさまざまな角度から把握し、多角的に可能性を追求しようとしたのだ。

「評定値は基礎学力を測るのに役立ちます。模試の偏差値は高くても評定値が低ければ、普段の学習をおろそかにしていることが多く、最終的に学力は伸び悩むことも考えられます。逆に、1・2年生で高い評定

値であれば、しっかり学習に取り組んできた証拠であり、今は結果が出ていなくても、最後に大きく伸びる可能性があるので」(山田先生)

出欠状況も同様だ。遅刻や欠席が少ない生徒は最後まで粘り強く頑張れる可能性が高い。しかし、安易な欠席が多い生徒は、最後に諦めてしまいうことも考えられ、精神的な支援

*学校資料をそのまま掲載

が重要になる。生活面の情報もきちんと追うことで、模試の結果だけでは見えない、生徒の基礎学力や心理状態を推し量ることが出来る。それによって、生徒の伸びしろを推測し、出願後をも見通して対策を立てていくことが出来るのだ。

系統別の事前検討会で会議を効率よく進める

事前検討会も見直した。年4回の検討会のうち、第3回までは全学年の進路指導部と3年生副担任による事前検討会を設けている。担任が参加しないのは、生徒の志望や担任の考えとは異なる観点から客観的に判断するためだ。

「担任が先入観を持つと、特定の志望に固執してしまうこともあり、広い視野を持って指導に当たれません。あくまで客観的なデータに基づき、生徒の可能性を広げる視点を持つことが大切なのです」(山田先生)

事前検討会の方法も変えた。以前はメンバー全員で全生徒を成績順に検討していたが、新しい方法では文系・理系で各二つ、計4グループに分かれ並行して行うことにした。

具体的な手順は次の通りだ。生徒のデータを一人ずつ検証し、志望校の合格可能性をA〜Eで判定。加えてコメント(判定の根拠、志望校の適切性、他の志望校の可能性、補強すべき科目など)を準備し、検討会での生徒資料に記入する。以前は本検討会で担任に口頭で伝えていた内容をあらかじめ1枚にまとめることで、本検討会の効率化を図った。

「これまでは、事前検討会を本検討会の前週の金曜日曜に実施していました。深夜や休日に顔を合わせて意見を述べ合うことは教師の一体感を醸成するには良い機会でしたが、負担が大きくなり過ぎていました。4グループに分けることで、検討時間が短縮され、平日の放課後(本検討会前週の水曜日金曜日)に行えるようになりました。教師の負担が軽減すると共に、必要なメンバーが参加できるようにしました」(山田先生)

しかし、この方法は、研修面から考えると教師が特定の系統に関する知識しか積み上げられないデメリットもあると、山田先生は話す。

「若手教師に進路指導に求められる多様な知識をしっかりと伝承する方

法を模索する必要があります」

検討会の結果で生徒を揺さぶり成長を促す

6月下旬に行う第1回の本検討会では、生徒の志望校や学力の共有、合格に向けた課題の把握と夏休み中の対策などがテーマとなる。第2回は9月下旬で、夏休みの取り組みの結果と生徒の志望の変化を確認する。

12月上旬の第3回には出願先をシミュレーションする。生徒の成績と志望校を見て、「センター試験が〇点なら第1志望に出願」というように出願先を絞り込む。そこに事前検討会で出した進路指導部の見解と生徒の志望を交え、妥当性を議論する。第4回はセンター試験後に、生徒一人ひとりのボーダーラインを確認し、個別学力試験の力を見極めて、出願校候補を決定する。

検討会の目的の一つは、生徒に揺さぶりをかけるため、本当にその志望で良いのか、覚悟を持って受験に臨もうとしているのかを担任が問い掛けられるようになることでもある。特に、第1回の検討会は生徒の可能性を広げる場だ。担任や進路が

知恵を出し合い、あえて生徒の志望とは異なる大学を選び、検討会直後に行われる二者面談で、検討会での結果を生徒に投げ掛けることもある。第2回の検討会は、二者面談以降の生徒の様子を見て、志望校に対する意志は本物だったか、受験に向けた覚悟は出来ているかを確認する。揺さぶりの結果、視野を広げて志望を変える生徒、あくまで第1志望にこだわる生徒など、その反応はさまざまだが、教師は生徒の変化を見て、再度揺さぶりをかけるか、第1志望校に向かわせるかの方針を立て、次の面談に臨む。

進路指導副主任の鬼塚聡先生は、「本校に赴任して驚いたのは、生徒に志望校をしっかりと考えさせていることです。あえて壁をつくり、それを越えさせることで、生徒を大人にしていく過程は、本校の特色の一つだと思います」と語る。

担任としてどうしたいか 明確な意見を持つ

本検討会は、担任と生徒、進路という三者の意見がぶつかり合う場だ。生徒をどのようにしたいのかと

いう担任の思い、生徒自身の夢や志望、データを基に導き出した進路指導部の見解を交錯させることによつて、生徒の志望を越えた幅広い可能性が見えてくるという。

それだけに担任がしっかり意見を持つことが何よりも重要になる。

「生徒の志望を優先することが教師のすべき判断だと考える人もいますが、生徒は未熟で、多くの選択肢の中から自分の進路を選んでいるとは限りません。生徒が本当にやりたいことは何か、適性はあるのかということ踏まえて、幅広い可能性を提示するのが教師の役目であり、生徒も多くの選択肢の中から選ぶからこそ、志望への思いやこだわりを強くするのは」（山田先生）

本検討会は担任にとって試練の場だ。「生徒の志望通り」という教師には「担任として、その生徒の将来をどう考えるのか」と厳しく問う。時には、進路指導室で個別に話し合うこともあるという。進路指導部の石橋周一郎先生は次のように話す。「生徒をどうしたいのかという考

えや事前調査が甘いと、検討会でどんだん突っ込まれました。生徒の意志を尊重すること、最適な道を探ることは、必ずしも同じではないことを検討会で学びました」

本検討会は担任にとってプレッシャーではあるが、結論が出れば、そのアドバイスは担任にとって心強い後ろ盾になる。進路指導部の北川昭彦先生は次のように述べる。

「我々は、生徒や保護者に決して不信任を抱かせてはなりません。検討会の意見は学校の総意です。それを自分なりに消化し面談に臨むことで、初めての3年生担任であっても自信を持って生徒や保護者にアドバイスできるのです」

「検討会の目的は、指導の最前線に立つ担任を支援することです。検討会で得た結論に対して保護者が納得しない場合は、進路指導部が話すこともあります。生徒と向き合っているのは自分一人ではなく、学校全体で生徒を見守っているということ、先生方は検討会を通じて感じていると思います」（山田先生）

生徒の信頼を得る決め手は教科指導力

教科担任にとつても、検討会は試練の場だ。

合格可能性を探る時、生徒に個別学力試験の力があるかどうかは重要な情報だが、それを答えられるのは日頃授業で生徒と接している教科担任だけだ。本検討会で「個別学力試験の物理は大丈夫か」「小論文は書けるか」と聞かれれば、「大丈夫です」「この大学の問題にはこういう傾向があるのでこの生徒には向かない」などの確に答えることが必要になる。普段どれだけ生徒とかわかり、学力を把握しているかが問われ、入試問題研究を丁寧に行っているかも明らかになるのである。

「生徒から信頼を得る決め手は、教科指導力です。授業で分かりやすく教え、成績を伸ばすことも大切ですが、数字に表れない学力を正しく分析できる力も、教科担任に求められています」（山田先生）
こうした教科担任の意見に対し、

担任はそれが他クラスの生徒の分析であつてもメモを取り、知識を吸収する姿勢が求められる。

「他クラスの生徒でも、『今の意見は自分のクラスの生徒に対しても当てはまる』『あの生徒もこの大学の推薦入試を受験できそうだ』などと考えながらメモを取るよう心掛けています。他の担任の説明を聞き、『この先生はここまで調べているんだ』『資料をここまで読み込んでいるのか』と、刺激を受けることも少なくありません」（北川先生）

「担任としても、教科担任としても、ある程度のプレッシャーは必要です。自分が生徒のために考えたことが、ベテランの先生方に認めてもらえれば自信になりますし、指摘は良い勉強になります。進路指導部に負けない心構えで検討会に臨むくらいの方が、意見が活発に飛び交い、充実した検討会になるのではないのでしょうか」（石橋先生）

同校の志望校検討会は、ベテラン・若手を問わず、教師同士が刺激を与え合う場にもなっている。